



<場所>と<あいだ>： 知の統合への哲学的アプローチ

野家 啓一*

“Place” and “Between-ness”: Philosophical Approach to the Integration of Knowledge

Keiichi NOE*

Abstract— Modern science developed its methodology through the Scientific Revolution in 17th century and established its social institution through the second Scientific Revolution in 19th century. In the latter period, science was specialized from science to sciences, and lost its unity as “natural philosophy.” The mainstream of scientific thought consists of atomism, analytic method and local optimization. To overcome the specialization of science and to realize the integration of knowledge, it may be stimulating to consult the intellectual heritage of Japanese thought which includes the unique concepts of “place (basho),” “scene (bamen)” and “between-ness (aida).”

Keywords— scientific revolution, trans-science, place, scene, between-ness

1. はじめに

横幹連合が提唱する「モノづくりからコトづくりへ」というスローガンは、哲学の観点から見てもきわめて興味深いものがある。それは、17世紀の科学革命によって成立し、それ以降われわれの思考を支配してきた近代科学的世界像に対する根本的な挑戦を含むからである。そのほかにも「21世紀の学術における横断型基幹科学技術の役割」[1]を参照すると、以下のような刺激的な問題提起がなされている。

- 科学技術の部分性と人間・社会の全体性
- 細分化に抗して「知の統合」を目指すこと
- 第3の科学革命
- モノとモノとの新たな関係性
- 「部分最適化」から「全体最適化」へ

本稿では、以上のような問題提起を受けて、哲学の観点からそれらの論点を捉え直し、敷衍することを試みたい。前半では、近代科学の歴史的発展過程を振り返りながら、「細分化」の方向とは異なる「もう一つの科学」の

可能性を探る。後半では、<場所>と<あいだ>という二つの概念を軸にして、近代日本の人文学において展開されてきた、近代科学とは方向を異にする「もう一つの見方」を掘り起こすことを試みる。

2. 近代科学の成立と展開

2.1 近代科学の方法：ガリレオとデカルト

近代科学は17世紀の科学革命によって論証と実験を2本の柱とする科学的方法を確立し、19世紀半ばの第二次科学革命を通じて、社会制度としての仕組みを整えた。それと同時に、旧来のアリストテレス的自然像を崩壊に導き、新たな科学的世界像を樹立したのである。

その基盤を築いたのは、ガリレオによって押し進められた「自然の数学化」であった。彼の「(宇宙という)この書は数学の言語で書かれており、その文字は三角形、円その他の幾何学図形であって、これらの手段がなければ、人間の力では、そのことばを理解できないのです」[2]という主張は、数学的自然科学の自立宣言ともいべきものである。それが可能となったのは、ガリレオが物体の一次性質と二次性質を明確に区別し、自然科学の考察対象を前者にのみ限ったことによる。そのことは以下の文言からも明らかである。

「かくして、わたしたちのうちに、味、匂い、音を生じさせるのに、外的物体について、その

*東北大学大学院文学研究科 仙台市青葉区川内 27-1

*Tohoku University, Kawauchi 27-1, Aoba-ku, Sendai

Received: 1 August 2010

大きさ、形、数、遅いもしくは速い運動といった以外のものが必要であるとは思いません。そのうえ、耳、舌、鼻、をそぎとってしまったら、形、数、運動はたしかにのこりますが、匂いも、味も、音もまったくのこりはしないと判断します。」[2]

つまり、自然界を構成する物体の客観的性質は数量化可能な一次性質（大きさ、形、数、運動など）のみであり、二次性質（味、匂い、音など）は実在の性質ではなく、主観的印象にすぎない、というわけである。この区別の導入によって、自然界は無視点的な数学的記述によって描かれる無色・無音・無味・無臭のモノから成る世界となった。後に20世紀の哲学者フッサールは、それを感覚に彩られた「生活世界」の隠蔽として告発し、ガリレオを「発見する天才であると同時に隠蔽する天才」[3]と呼んだのである。

このような計測可能な物理量（一次性質）によって組み立てられた自然を記述するために、ガリレオは数学的論証と構成的実験を基盤とする近代科学の方法（それはやがて「仮説演繹法」として定式化される）を確立した。ガリレオと並んで近代科学の礎石を据えたデカルトは、それを「学問の方法」として一般化し、以下の4つの規則を掲げている[4]。

- ① 明晰かつ判明に真と認めるもののみを受け入れる。
- ② 問題をできるだけ多くの小部分に分割する。
- ③ 単純なものから複雑なものへと思考を順序にしたがって導く。
- ④ 完全な枚挙と全体にわたる見直し。

要するに、複雑な全体を単純な部分的要素へと分割し、思考を階段を昇るように順序だてて導く、ということである。これは近代科学の「要素主義 (atomism)」を表明したものと見ることができる。

もう一つ、デカルトが踏み出した重要な一步は、「物心二元論」の提唱である。彼はこの世界を延長実体（物体）と思惟実体（精神）から成るものとし、両者は互いに独立であると考えた。それによって、二次性質に続いて心的性質（痛い、悲しい、愛する）もまた科学的考察からは排除され、自然界は純粋なモノの世界となったのである。

2.2 デカルトの敵とニュートンの敵

ガリレオとデカルトによって敷設された近代科学の路線は、その後「精密化」の一途をたどり、自然現象の解明に多大の成果を挙げて今日に至る。いわゆる「精密科学」の成立である。それを集大成し、地上の運動（物理

学）と天上の運動（天文学）を統一して古典物理学的の世界像を確立したのは、ニュートンの『プリンキピア（自然哲学の数学的原理）』であった。彼はそのなかで「哲学することの規則」として以下の4項目を挙げている[5]。「哲学」とはむろん「自然哲学」、後の自然科学のことである。

- ① 自然界の事物の原因として、現象の説明に十分である以上のものを認めるべきではない。
- ② 自然界の同種の結果は、できる限り、同じ原因に帰着されねばならない。
- ③ 物体の性質について、実験と合致するものはすべて普遍的なものと考えねばならない。
- ④ 現象から帰納によって推論された命題は、真実に近いものと見なされねばならない。

要するに、これは「同一原因 同一結果」の原則のもと、原因としては必要最小限のもののみを認め（オッカムの剃刀）、実験結果は普遍的なものを見なし、帰納法は信頼するに足る、という近代科学の方法の基本を述べたものにほかならない。これがガリレオとデカルトの路線を継承し、それをさらに自然科学一般へと拡張したものであることは明らかである。

しかし、近代の科学的思考が、このような「分析的思考」によって一色に塗りつぶされていたわけでは必ずしもない。デカルトの同時代人であったパスカルは、すでに「パンセ」のなかでデカルトに対する批判的姿勢を鮮明にしている。彼は「無益で不確実なデカルト」と述べたあとで、次のように続けている。

「デカルト。大づかみにこう言うべきである。「これは形状と運動からなっている」と。なぜなら、それは本当だからである。だが、それがどういう形や運動であるかを言い、機械を構成して見せるのは、滑稽である。なぜなら、そういうことは、無益であり、不確実であり、苦しいからである。そして、たといそれが本当であったにしても、われわれは、あらゆる哲学が一時間の労にも値するとは思わない。」[6]

最後の「哲学」は、ここでも自然哲学（＝自然科学）を指している。モノの「形状」と「運動」からなるデカルト的世界像を、パスカルは無益で不確実と断じている。その行き着く先は「機械」ではあっても「人間」ではないからである。

周知のように、パスカルは人間の精神の二つの働きを区別し、一方を「幾何学的精神」、他方を「繊細の精神」と呼んでいる。前者は物事を原理から出発して一步一步確実に推論する能力、後者は物事の全体的あり方を

一挙に一目で直感的に把握する能力のことである。それを「分析的思考」と「総合的思考」と言い換えることもできる。だが、この二つの見方を両立させることは難しい。パスカルが「幾何学者が繊細で、繊細な人が幾何学者であるのは珍しい」[6]と述べるゆえんである。むしろ、パスカルが目指していたのが「繊細な幾何学者」であることは言うまでもない。それはまた、われわれの今日的課題でもあろう。

もう一人、「デカルトの敵」と呼ばれた哲学者がいる。ナポリ大学の修辞学教授 G. ヴィーコである。彼はデカルトの方法を「クリティカ」と呼ぶ。これは批判的な判断能力のことであり、具体的には数学や論理学の方法を指す。このクリティカに対して、ヴィーコは「トピカ」を対置する。トピカとは「場所」を意味する修辞学（弁論術）の用語であり、現在の「トピック」の語源ともなっている言葉である。すなわち、物事の論点や論拠のあり場所を発見する技法を意味する。議論においては、まず論点（トピック）が提示され、その後に論証が行われる。それゆえヴィーコは、「ちょうど論点の発見が、本性からして、その真理性の判断に先立つように、トピカは教授において、クリティカに先立たねばならない」[7]と主張する。ところが、デカルトの分析方法（クリティカ）はその順序を逆転させているのである。

トピカの能力を支えているのは「共通感覚」、すなわちコモンセンスにほかならない。これは共同体のなかで培われ、共有された規範的な感性および知性のことである。共通感覚は「真理」からではなく「真らしいもの（verisimilis）」から生れる。そこからヴィーコは、幾何学の方法（クリティカ）を自然学に導入しようとするデカルトを批判する。なぜなら、幾何学はわれわれが作ったものであるから厳密な証明が可能であるのに対し、自然は神が創造したものである以上、自然法則を証明することは神に成り代わることだからである。それゆえ自然学においては、われわれは「真らしいもの」を知りうるにすぎない。現代の言葉で言えば、自然学の知識は反証可能な「仮説」に留まる、ということである。こうしてヴィーコは、疑い得ない究極の「真理」から自然学の知識を演繹しようとするデカルトに対し、共通感覚に基づく「真らしいもの」の重要性を指摘する。彼の有名な「真なるものは作られたものに等しい」[7]というテーゼは、神が創造した自然を前にしての知的謙虚さの必要性を表明しているのである。

パスカルやヴィーコが「デカルトの敵」であったとすれば、「ニュートンの敵」と呼びうるのは、文豪のゲーテである。彼は文学者であると同時に、優れた自然科学者でもあった。ただし、ゲーテが専門としたのは「自然哲学」ではなく、植物学や動物学など生命体を扱う「自然史（博物学）」の領域である。

ゲーテは「色彩論」において、ニュートンの光学実験を批判し、「彼が犯した誤りは、唯一の、しかも人為的な現象を根底に据え、そのうえに仮説を築き、この仮説からきわめて多種多様な無際限の現象を説明しようとしたことである」[8]と述べている。これはニュートンがプリズムによって太陽光線を分析するのみで、われわれの多様な色彩感覚の経験を無視していることへの批判である。その背景にあるのは、分析と総合の相補性に対する洞察にほかならない。そのことは「分析論者が陥りやすい大きな危険は、それゆえ、なんらの総合も根底にないところで彼の方法を用いることである（略）なぜなら、究極において彼が研究を行うのはほんらい再び総合に達するためである」[8]という言葉にも表れている。こうした彼の科学思想は、生命体についての自然史研究に由来する。

「しかし、これらの分析の努力は、繰り返し行いすぎると、多大の弊害をも生ずる。生物はなるほど諸要素に分解されるが、それをこれらの諸要素から再び合成し、生き返らせることはできない（略）それゆえ、科学者内部にもあらゆる時代に、生命ある形成物そのものを認識し、それらの外面的に目に見え手に取ることのできる諸部分の関連を把握し、これらを内面の暗示的な現象として取り上げ、こうして全体を直観のうちにある程度まで自分のものとしたい、という衝動が起こってきた。」[9]

これに続けてゲーテが、「全体を直観のうちに」捉えたいという科学的欲求を「芸術衝動」と関連づけていることは、注目されてよいだろう。その意味で、科学と芸術とは相反するものではなく、ゲーテその人の内面においてと同様に、メビウスの帯のように反転しつつ繋がっているのである。

2.3 科学の制度化と変貌

ヨーロッパの科学研究において、「自然哲学」と「自然史」は長いあいだ二つの主たる流れを形作ってきた。しかし、19世紀半ばに出来た第二次科学革命を通じて、科学は急速に専門分化を遂げる。すなわち自然哲学は物理学や化学へ、また自然史は生物学や地質学へと、それぞれ個別の専門分野として再編成されたのである。「科学者 (scientist)」という英語が W. ヒューエルによって造語されるのも、この時期のことであった。

それとともに、専門学会が次々と設立され、そこでは研究成果が学術雑誌 (journal) を通じて公表されるようになり、その品質管理を行うために同僚評価 (peer review) によるレフェリー制度が導入されるにいたる。いわば第二次科学革命を経て、科学は社会制度のなかに組み込まれ、今日の「科学研究」の基本的スタイルが確立される

のである。それを「アカデミズム科学」と呼ぶことができる。すなわち、科学者が大学や研究所などの象牙の塔において、自らの好奇心に衝き動かされて研究テーマを選び、個人として進める研究スタイルのことである。アインシュタインやキュリー夫人はその典型と言ってよい。

ところが、20世紀に入ると科学研究のスタイルは「アカデミズム科学」から「産業化科学」へと大きく変貌する[10]。その背景にあるのは、科学と技術の融合である。それに伴って、科学者の研究目的も「好奇心駆動型」から「プロジェクト達成型」へと変化する。後者は政府や企業からの資金援助を受け、委託されたテーマについて複数の科学者がチームを組んで共同研究を進め、期限までにプロジェクトの達成を目指す研究スタイルである。いわば、研究者は「科学者」であるよりも「科学企業家 (scientific entrepreneur)」であることが求められることになる。同時に、研究評価においても、「同僚評価」に加えて納税者や委託者に対する「社会的説明責任 (accountability)」が問われざるをえない。こうして科学研究は、社会制度の一翼を担うとともに、効率性と採算性を要求する市場原理に晒されることになるのである。

20世紀後半には、科学研究はさらに「トランス・サイエンス」の時代を迎える。トランス・サイエンスとは、A. ワインバーグによれば「科学によって問うことはできるが、科学によって答えることのできない問題群からなる領域」を意味する[11]。具体的には、環境問題、BSE問題、インフルエンザ対策などのように、科学と政治・経済が複雑に絡み合っ、切り離すことのできないような諸問題のことである。事実と価値が交錯する領域と言ってもよい。いわばこのような領域に関わる科学者には、事実判断のみならず、価値判断をも求められているのである。

それを別の面からいえば、現代社会が「リスク社会」化しているということにほかならない。つまり、原子力発電所や脳死臓器移植を例に挙げるまでもなく、現代社会が必要としている先端技術は社会的リスクと表裏一体のものであり、今日の政府は「富の配分」とともに「リスクの配分」をも手がけなければならないのである[12]。そのような状況下では、これまでの科学が追求してきた「局所最適性」だけでは問題の解決につながらず、社会的文脈をも考慮した「全体最適性」の追及が喫緊の課題となるのである。

以上のように問題を確認したところで、以下ではそのような「全体最適性」の考察に示唆を与えられる幾つかの概念を、近代日本の知的遺産のなかから取り上げ、議論の深化のために参考に供したい。

3. こと・場所・あいだ

3.1 「モノ」と「コト」

まず取り上げたいのは、横幹連合の「モノづくりからコトづくりへ」という標語に見られる「モノ」と「コト」という対概念である。「岩波古語辞典」には、次のような定義が掲げられている[13]。

もの 「形があって手に触れることのできる物体をはじめとして、広く出来事一般まで、人間が対象として感知・認識しうるものすべて。モノは推移変動の観念を含まない。」

こと 「コト(事)は、人と人、人と物とのかかわり合いによって、時間的に展開・進行する出来事、事件などという。時間的に不変の存在をモノという。」

われわれは「恐るべきモノ」とも言えば、「恐るべきコト」とも言うように、モノとコトの区別は一筋縄ではいかない。ただ、上記の定義を参考にすれば、モノとは一定の空間的位置を占め、知覚(とりわけ視覚と触覚)によって感知される、時間的変化を被らない対象、物体、物質のことと言えそうである。それに対して、コトとはモノとモノとの関係や相互作用から生ずる時間的持続をもった出来事や事態のことであり、そこには関係、機能、作用、制度なども含まれる。少々乱暴に要約するならば、モノは「体」であり、コトは「用」と言えるであろう。

それからすれば、例えばコンサート(音楽会)はモノではなくコトである。もちろん、コンサートは演奏用のホール、楽器、指揮者、楽団員、聴衆、などのモノが存在しなければ成立しない。しかし、それらのモノが集められただけではコンサートは始まらない。コンサートはそれらのモノが有機的に関係し合い、結びつくことによって初めて、一定の時間的持続をもったコトとして実現されるのである。

同様のことは、一見するとモノと見える「大学」についても言える。学生や教員や事務職員、机や椅子や黒板、図書館や食堂や運動場、それらのモノが集められただけでは大学はまだ成立しない。それらが有機的に組み合わせられ、講義や試験や単位認定がなされて初めて、大学はその機能を果たしうるのである。その意味では、コトは何らかの形で「行為」の契機を含むとすることができる。そして行為は「始め」と「終り」をもつがゆえに、行為によって実現されるコトもまた、一定の時間的持続をもつ出来事となるのである。

コトはモノのようにには目で見たり手で触ったりはできない。行為もまた同様である。たとえば「大福を頬張る」という行為を取り上げてみよう。たしかにわれわれは白くて丸い大福を眼で見、それに手を伸ばして柔らかな餅の肌に触れ、鼻でほのかな香りを、舌で甘さを感じ

じる。だが、大福を頼張るという行為は、それらの個別感覚のなかには存在しない。個別感覚が告げるのは、あくまで大福というモノの存在である。大福を頼張るといふコト、行為はそれらの感覚が総合されたところに存する。アリストテレスはこのように個別感覚を統合する高次の感覚の働きを「共通感覚」と呼んだ[14]。この共通感覚が「コト」の知覚に密接に関係していることについては、次のような木村敏の指摘がある[15]。

「アリストテレスが「共通感覚」と呼んだのは、このように考えると、「…ということ」についての感覚のことだといえる。個々の個別感覚が、主語的・名詞的な「もの」についての感覚であるのに対して、共通感覚は「もの」を「もの」たらしめている基礎的な場所としての「こと」についての感覚であり（中略）一般的には私と世界とが実践的に出会っているという「こと」についての感覚だということができる。」

つまり、個別感覚が対象としてのモノについての感覚であるのに対し、共通感覚はそのモノが置かれているコンテキスト（文脈）、すなわち「場所」についての感覚だということである。そのことは、われわれの日常的な言語表現に即しても確かめることができる。主語と述語からなる包摂判断「SはPである」を取り上げよう。たとえば「この薔薇は美しい」という文において、主語は対象を指示する機能によってモノを同定し、述語はそのモノの性質を叙述することによって、全体として「この薔薇は美しい」というコトないしは事態を表現するのである。これを「体言」と「用言」の機能の違いと言い換えてもよい。

ここで「美しい」と判断するのは私（主体）であるから、その判断は広い意味での私の行為と考えるとよい。また「美しい」といふコトは、モノ（客体）の客観的性質でも私の主観的思い込みでもない。美的判断には一定の間主観性（共通性）が認められるからである。それを支えているのは、「共通感覚」のもう一つの意味であるコンセンサス（常識）にほかならない。それゆえ「美しい」という事態は、主体と客体の「あいだ」と同時に、主体と主体の「あいだ」に成立するコトなのである。さきに木村が「私と世界とが実践的に出会っている」と表現したのも、これと別の事柄ではないであろう。

ところで、西欧の哲学的伝統においては、判断の主語述語の分節構造に即して、主語的・名詞的であるモノの存在こそ世界の究極の構成要素と見なされてきた。アリストテレスはそうした究極のモノを「実体」ないしは「基体」と呼び、それを「基体というのは、他の事物はそれの述語とされるがそれ自らは決して他のなにものの述語ともされないそれ〔主語そのもの〕のことである」[16]と特徴づけている。いわば、自己同一的で不生不滅

のモノである。それに対して、東洋および日本の思想的伝統のなかでは、モノよりはコト、有よりは無が重視されてきたと言ってよい。以下ではその幾つかの例を取り上げ、モノからコトへの世界像の転換を促す手がかりとしたい。

3.2 場所と述語的論理

アリストテレスの「つねに主語となって述語とならないもの」という実体の定義に対して、それを逆転し、「つねに述語となって主語とならないもの」を追求したのは西田幾多郎であった。彼はそれを「場所」と名づける。その思考のプロセスは、西田自身の錯綜した文章のせいもあって甚だわかりにくい。要点のみを摘記すれば、以下の通りである。

われわれの認識は、基本的に「SはPである」という包摂判断によって表現される。西田によれば「包摂判断とは一般なるものの中に特殊なるものを包摂することである。包摂するというのは、特殊なるものを主語として、一般なるものをこれについて述語するということ」[17]にほかならない。つまり、個物は種に包摂され、種は類によって包摂される、といった具合である。この包摂関係を西田は「於てある」という関係として捉え、その関係が成立するところを「場所」と呼ぶ。すなわち「有るものは何かに於てなければならぬ、論理的には一般なるものが、その場所となる」[17]というわけである。

アリストテレスはこの包摂関係を主語の方向に突き詰め、その果てに主語となって述語とならない究極の個物を想定し、それが実体（基体）であると考えた。それに対して西田は、包摂関係を述語の方向へ、すなわち個物種類…の方向へ突き詰め、その果てに究極の述語面を見出し、それを「真の無の場所」と名づける。いわば無限大の述語にほかならない。彼によれば「包摂的關係においての一般的方向、判断においての述語的方向を何処までも押し進めて行けば、私のいわゆる真の無の場所というものに到達せなければならぬ」[17]のである。それが「無の場所」と呼ばれるのは、いっさいの有るものを包摂する一般者である以上、それはもはや「有」の一部ではありえないからである。それゆえ「種が類に含まれるという意味において有は無に於てある」[17]と言われる。また「真の」と形容されるのは、それが有と対立関係にある無ではなく、「真の無はかかる有と無を包むものでなければならぬ」[17]という理由による。つまり、有と無の対立関係を成立させる基盤としての場所である。そこから西田は、この述語的な場所こそ「基体」の名に値する、と主張する。

「無は何処までも有を裏打している、述語は主語を包んでいる。その窮まる所に到って主語面

は述語面の中に没入するのである。有は無の中に没し去るのである（中略）是において述語的なものが基体となると考えることができる。」[17]

こうして西田はアリストテレスの「主語的論理」に対して、独自の「述語的論理」を提起する（ただしこれは、現代論理学でいう「述語論理」とは異なる）。あるいはそれを「モノの論理」に対する「コトの論理」と呼ぶこともできる。主語が体言で表現されるモノであるとすれば、述語は用言で表現され、主語を包摂してそれを限定する機能（コト）だからである。

ヨーロッパ語においては、“subject”は文法的「主語」であると同時に、存在するもの（有）の全体である世界を認識する「主観」でもあり、世界に働きかける「主体」をも意味する。それゆえ“subject”は世界を支え、基礎づけるもの、すなわち「基体」と考えられてきた。とりわけ近代以降は、世界に働きかける主体（主観）は人間（自我）であると理解され、それ以外の操作可能な事物はすべて客体（客観）と見なされるにいたった。この主体（主観）と客体（客観）の明確な分離こそ、近代的世界像の骨格をなすものである。

それに対して西田は、「主客分離」ではなく「主客合一」こそが世界の根本的なあり方だと考える。先に彼が「主語面は述語面の中に没入する」あるいは「有は無の中に没し去る」と述べていたことに注目しよう。主語の方向へ考察を徹底すれば、到達点は独立自存するモノであり、述語はその性質を叙述する役目を果たすにすぎない。他方で述語の方向へ考察を徹底すれば、その到達点は無限大の述語、すなわち「真の無の場所」である。この場所は有と無の対立が生じる地盤でもあるがゆえに、そこでは主語と述語もまた対立せずに接近する。つまり、そこではモノは自立しておらず、その場所に「於てある」という関係性、言い換えればコトの文脈のなかの一契機なのである。そのことを西田は「限定せられた有の場所が無の場所に接した時、主客合一と考えられ、更に一步を進めれば純粋作用という如きものが成立する。」[17]と述べている。この主客合一の立場からすれば、西洋哲学の中心に位置する「自我」の概念もまた、モノではなくコトの観点から捉え直される。

「普通には我という如きものも物と同じく、種々なる性質を有つ主語的統一と考えるが、我とは主語的統一ではなくして、述語的統一でなければならぬ、一つの点ではなくして一つの円でなければならぬ、物ではなく場所であればならぬ。」[17]

こうして西田は、自我をはじめ、主体や実体など、総じて「存在（有）」を核にして展開してきた西洋哲学をい

ま一度見直すことを要求する。彼が「無」といういささか神秘的な響きのする用語を採用したのも、モノ（有）に対するコト（無）の先行性ないしは根源性を強調するがためにほかならない。その意味で西田は、「無」という概念を掲げることによって、「有」を基盤とする西欧の世界観を批判し、それを通じてモノのように知覚的には捉えられないコトのあり方を浮き彫りにしようとしたのである。

3.3 「場面」と「あいだ」

西田の「場所」に限らず、日本の思想的伝統の中には、独立した要素ではなく、それが置かれた「場」すなわちコンテクストを重視する傾向が見られる。それは部分よりは全体を、実体よりは関係を、モノよりはコトを根底的と考える立場である。その一例として、国語学者の時枝誠記が提起した「言語過程説」を挙げることができる。彼は西洋の言語学説の基盤をなす言語本質観を批判しながら、次のように述べている。

「言語過程説は、言語を以て音声と意味との結合であるとする構成主義的言語観或は言語を主体を離れた客体的存在とする言語実体観に対立するものであって、言語は、思想内容を音声或は文字を媒介として表現しようとする主体的な活動それ自体であるとするのである。」[18]

ここで時枝が「構成主義的言語観」を批判するとき念頭にあったのは、ソシュールの言語学である。彼が言語過程説の仮想敵と見なしたのはソシュール言語学であった。また「言語実体観」とは、言葉を音素や意味素などの要素的単位に分解し、それらから現実の言語を再構成しようとする方法論を指すものと考えてよい。

それに対して時枝は「或る事物を観察するのに、その構成要素を明らかにすると同時に、その存在条件を考慮するということが重要なことである。」[18]と述べている。彼は家屋を例にとり、それを説明する。例えば、玄関、居間、客間、台所などは家屋の構成要素である。だが、それだけでは家屋は成立しない。家屋が存在するためには、それを支える地盤、それを作る製作者、そこに住む居住者を必要とする。それらは家屋の構成要素ではないものの、家屋を家屋たらしめている存在条件にほかならない。時枝はこれにならって言語の存在条件を考察する。彼によれば、言語の存在条件とは、①主体、②場面、③素材の三者である。このうち「場面」は先の「場所」と類似した概念であるが、両者の違いは以下のような点にある。

「一方それは場所の概念と相通ずるものがあるが、場所の概念が単に空間的位置的なもの

であるのに対して、場面は場所を充たす処の内容をも含めるものである。この様にして、場面は又場所を満たす事物情景と相通ずるものであるが、場面は、同時に、これら事物情景に志向する主体の態度、気分、感情をも含むものである。」[18]

場面が事物情景だけから構成されるものならば、それはモノの集合体であり、客体的世界にすぎないであろう。だが、そこに主体の態度、気分、感情をも含まれることによって、場面は「主客の融合した世界」となる。いわば、場面とは主体と客体との「あいだ」に成立するコトにほかならない。先に見たように、コトは何らかの形で「行為」の契機を含んでいる。それは場面というコトについても言うことができる。実際、時枝は行為に言及して「場面の概念が、言語の考察に必要である」ということは、場面が常に我々の行為と緊密な機能的関係或は函数的関係にあるが為である」[18]と述べている。ここで機能的関係や函数的関係が、コトの特徴を表す概念であることはいうまでもない。それゆえ、場面は一種の拘束条件として主体の行為を制約し、言語表現を成立させるのである。その意味で、時枝の言語過程説は、言語を実体あるいはモノとしてではなく、一定の場面において成立するコトとして捉える言語論ということができる。それを支えているのは「主客融合の世界」であり、主体と客体の「あいだ」という概念なのである。

先に取り上げた家屋の例に戻ってみよう。家屋の構成要素として挙げられた玄関や居間は、考えてみれば単なるモノではない。たしかに居間を形作っているのは、壁や柱や家具調度などのモノである。しかし、それらのモノを集めただけでは居間として機能しない。当然だが、豪華な家具調度が足の踏み場もないほど詰め込まれた空間は、居間としての役目を果たさないであろう。居間が居間であるためには、そこに住む人間が移動でき、くつろげる空間（余地）が必要なのである。言いかえれば、居間を居間たらしめているのは、柱と柱、壁と壁の「あいだ」に開かれる何も無い空虚な空間にほかならない。そのことを岡倉天心は、老子の「虚」という概念を援用しながら次のように説明している。

「物の真の本質は空虚にのみ存すると彼[老子]は主張した。たとえば、部屋の実質は屋根と壁で囲まれた空虚な空間に見いだされるのであって、屋根と壁そのものにはない。水差の効用は、水を容れる空所にあるのであって、水差の形状やその材質にあるのではない。「虚」は一切を含有する故に万能である。虚においてのみ運動が可能になる。」[19]

要するに、部屋や水差の本質はその形状や材質、つまりモノとしてのあり方ではなく、その働きや機能にある

ということであろう。その働きや機能は、空虚や空所において実現されるコトにほかならない。加えて、居間の場合であれば、そこに住む「主体の態度、気分、感情をも含む」と言うことができる。居間に必要とされる「くつろぎ」や「安心感」や「ゆとり」といった雰囲気は、モノそのものではなく、人とモノとの関係によって醸し出されるコトなのである。

それゆえ、「こと」は、人と人、人と「もの」との「あいだ」に起こる出来事である」[20]という木村敏の言葉は、事態を正確に捉えたものと言うべきだろう。たしかに、「あいだ」をモノのように目で見たり、手で触ったりすることはできない。しかしそれは、モノとモノ、人とモノとを関係させ、結びつけることによってコトを現前させる不可視のネットワークなのである。

4. おわりに

これまで見てきたように、17世紀の科学革命を通じて確立された近代科学の方法論は、モノを構成要素にまで分析し、そのうえで全体を要素の算術的総和として捉えようとする「分析的思考」と、問題を細分化してその解決を「局所最適性」の追求に委ねる思考法によって形作られてきた。このガリレオとデカルトによって創始され、ニュートンによって体系化された科学的思考の伝統は、そのご精密さと洗練の度を加えながら、現代科学の方法論として定着している。

だが、この近代科学の主流となった思考法が、すべての学問領域を覆い尽くしてきたわけではない。ヨーロッパの思想伝統のなかには、「分析的思考」に対して「総合的思考」を対置し、「局所最適性」に対しては「全体最適性」の追求を目指すもう一つの流れが存在した。反デカルトあるいは反ニュートンの旗印を掲げたパスカル・ヴィーコ「ゲーテとつながる思考の系譜」である。彼らは主流の近代科学と拮抗する「もう一つの科学」のあり方を模索したといってもよい。とはいえ、その系譜は伏流水として地に潜り、わずかに自然史（博物学）や人文学の領域で一定の影響を与えはしたものの、精密科学のなかで顕在化することはなかった。だが、20世紀後半からの「トランス・サイエンス」の時代にあって、科学が人間や社会との密接な関わりのなかで統合的な知を目指さねばならない現在、こうした伏流水のもつ知的ポテンシャルはいま一度見直される必要があると言えよう。

そのような観点から近代日本の思想伝統に目を向けるとき、そこには知の統合の手がかりとなる幾つかの概念装置が見出される。西田幾多郎が「東洋文化の根底には、形なきものの形を見、声なきものの声を聞くと云った様なものが潜んで居るのではなからうか」[21]と述べているように、東洋や日本の思想伝統には、実体的なモノ

ノ(体)よりも形をもたないコト(用)を重視する傾向が見られる。工芸品などに「用の美」を見るといった考え方もその一つである。「用」も「美」もモノと人との一定の関係性に置かれたときに生じる価値にほかならない。そこから、モノそのものよりも、モノが置かれ、関係するコンテキスト、すなわち「場所」や「場面」を根底的とする考えが生れる。場所や場面はモノの存立条件なのであり、それを「あいだ」と言い換えることもできる。「あいだ」はモノに付随する消極的性質ではなく、モノとモノ、モノと人を繋ぐ絆であり、モノの働きを支える積極的契機なのである。

以上のことからすれば、主にわが国の人文学の伝統のなかで鍛造されてきた「場所」や「場面」や「あいだ」などの概念は、西洋の実体主義的思考に対する一つの反措定であり、「もう一つの科学」のあり方を模索したパスカル ヴィーコ ゲーテの知的系譜にも連なるものと言うことができる。それはまた、モノからコトへの転換を説き、「知の統合」を掲げる横幹連合の目指すところとも無縁のものではないであろう。

参考文献

- [1] 21世紀の科学技術における横断型基幹科学技術の役割、*学術の動向*, Vol.10, No.8, pp. 7-60, 2005.
- [2] ガリレオ: 偽金鑑識官, 山田慶児・谷泰訳, 中公クラシックス, 中央公論新社, pp. 1-444, 2009.
- [3] フッサール: ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学, 細谷恒夫・木田元訳, 中公文庫, 中央公論社, pp. 3-553, 1995.
- [4] デカルト: 方法序説, 谷川多佳子訳, 岩波文庫, 岩波書店, pp. 7-137, 1997.
- [5] ニュートン: 自然哲学の数学的原理, 河辺六男訳, 中央公論社, pp. 47-568, 1971.
- [6] パスカル: パンセ, 前田陽一・由木康訳, 中公文庫, 中央公論社, pp. 7-610, 1973.
- [7] ヴィーコ: 学問の方法, 上村忠男・佐々木力訳, 岩波文庫, 岩波書店, pp. 9-152, 1987.
- [8] ゲーテ: 色彩論, 木村直司訳, ちくま学芸文庫, 筑摩書房, pp. 9-437, 2001.
- [9] ゲーテ: ゲーテ形態学論集・植物篇, 木村直司編訳, ちくま学芸文庫, 筑摩書房, pp. 23-408, 2009.
- [10] J.R. ラベッツ: 批判的科学, 中山茂訳, 秀潤社, pp.11-313, 1977.
- [11] 小林傳司: トランス・サイエンスの時代, NTT出版, pp. 2-288, 2007.
- [12] U. ベック: 危険社会, 東廉・伊藤美登里訳, 法政大学出版局, pp. 1-460, 1998.
- [13] 大野晋ほか(編): 岩波古語辞典, 岩波書店, 1974.
- [14] アリストテレス: 魂について, 中畑正志訳, pp. 4-185, 京都大学学術出版会, 2001.
- [15] 木村敏: 自分ということ, ちくま学芸文庫, 筑摩書房, pp. 8-223, 2008.
- [16] アリストテレス: 形而上学(上), 出隆訳, 岩波文庫, 岩波書店, pp. 21-313, 1971.
- [17] 上田閑照(編): 西田幾多郎哲学論集 I, 岩波文庫, 岩波書店, pp. 3-372, 1987.
- [18] 時枝誠記: 国語学原論(上), 岩波文庫, 岩波書店, pp. 9-346, 2007.
- [19] 岡倉天心: 茶の本, 桶谷秀昭訳, 講談社学術文庫, 講談社, pp. 13-224, 1994.
- [20] 木村敏: あいだ, ちくま学芸文庫, 筑摩書房, pp. 9-218, 2005.
- [21] 西田幾多郎全集, 第4巻, 岩波書店, pp. 3-436, 1979.

野家 啓一



1971年東北大学理学部卒業。76年東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論博士課程中退。南山大学文学部助手, 専任講師, 東北大学文学部助教授, 教授を経て2000年より東北大学大学院文学研究科教授。科学哲学, 言語哲学, 歴史哲学などの研究に従事。第20回山崎賞を受賞。